日比谷公園グランドデザイン
中間のまとめ

平成３０年１０月

日比谷公園グランドデザイン検討委員会

目　　次

序　章　日比谷公園グランドデザインのねらい
1　背景　1頁
（1）　公園の多面的活用の推進
（2）　日比谷公園周辺におけるまちづくりの動向
（3）　日比谷公園の歴史
2　目的　2頁
3　検討の視点とねらい　2頁
4　日比谷公園グランドデザインの5つの提言　2頁

第1章　日比谷公園の歴史と特性
1　日比谷公園の歴史　3頁
（1）日比谷公園の成立ちと施設の変遷
（2）日比谷公園の位置付け

2　日比谷公園の特性　6頁
（1）　利用特性
ア　静けさと賑わいが共存する利用空間
（2）　歴史的・文化的特性
ア　歴史を感じる施設
イ　ランドスケープを象徴する空間
（3）立地特性
ア　緑と水が集積する日本の顔
イ　文化・交流・迎賓機能が集積するまち

第2章　日比谷公園の将来像
1　検討の方向性　11頁
2　日比谷公園の将来像　12頁
3　ゾーン別の将来像　21頁

第3章　将来像の実現に向けて
1　事業実施のイメージ　23頁
（1）2020年に向けた取組
（2）事業の進め方
2　段階的な取組　23頁

序章　日比谷公園グランドデザインのねらい

１　背景

（１） 公園の多面的活用の推進

少子高齢化や価値観の多様化、世界的な都市間競争の激化、民間による公共的な活動の活発化といった社会状況の変化に伴う諸課題に対応しつつ、東京をより魅力的にしていくためには、都立公園の魅力や価値を向上させ、公園が潜在的に有する多様な機能を、都民、旅行者等の様々なニーズに対応して最大限に発揮させることでストック効果(※１)を高める取組を更に進めていく事が求められている(※２)。国においても、公園等の緑とオープンスペースの政策は、そのポテンシャルを都市、地域、市民のために最大限引き出すことを重視する新たなステージに移行すべきとしている(※３)。

(２)日比谷公園周辺におけるまちづくりの動向

日比谷公園周辺には、文化、交流、迎賓機能が集積する日比谷地区をはじめとし、霞が関、大手町・丸の内・有楽町、新橋・虎ノ門、銀座等、様々な性格を持ったまちがある。

また、各地区において国際競争力を向上させる施設の更新や、公共空間の活用を促進する取組も進んでいる。

直近では、日比谷公園に隣接して、国際ビジネスと芸術文化・エンターテイメントの複合施設が竣工し、日比谷公園を含むエリア全体に注目が集まり、周辺では開発の機運が更に高まってきている。

(３)日比谷公園の歴史

日比谷公園は、都市計画の前身となる市区改正設計において位置づけられ、日本初の近代的洋風公園として明治 36 年(1903)に開園した。その後、開園当時の設計思想を継承しつつ時代と共に変わる周辺地域や社会状況に併せて機能の充実を重ねてきた。現在も、皇居周辺のオープンスペースと共に中央公園として都市計画に位置づけられ、周辺の緑と連続した豊かな自然環境と園内の文化施設とが一体となり、日本の顔となる賑わいの場や文化交流拠点として活用されている。

※１　整備された社会資本が機能を発揮することによって、整備直後から継続的に中長期にわたり得られる効果のこと。防災力の向上や、生活の質の向上をもたらす効果、生産拡大効果がある。（都市公園のストック効果向上に向けた手引き 国土交通省（平成 28 年５月））

※２　都立公園の多面的な活用の推進方策について：H29.５東京都公園審議会

※３　新たなステージに向けた緑とオープンスペースの政策の展開について：H28.5 新たな時代の都市マネジメントに対応した都市公園等のあり方検討会

２　目的

上記の背景から、日比谷公園は、歴史的価値等の公園のポテンシャルを最大限に活かし、東京の魅力向上のため、周辺のまちづくりとも連携しながら、東京の顔となる中央公園（セントラルパーク）として多様な利用者のニーズに対応していく必要がある。

そのためには、行政等の公園施設の設置、管理者だけでなく、都民や利用者、公園に隣接する周辺のまちと公園の将来像を共有し、公園の魅力向上に取り組んでいくことが重要である。

そこで、日比谷公園グランドデザインでは、日比谷公園の将来像を利用者の視点から明らかにするとともに、将来像を実現するための主な取組を示すこととした。

３　検討の視点とねらい

多様な人々が利用する公園の魅力を向上させていくためには、公園が提供するサービスを利用者目線で総合的に点検、評価し、必要な改善とサービスの品質向上を図っていくことが重要である。このため、日比谷公園グランドデザインの検討に当たっては、多様な利用者の視点から点検を行うため、車椅子体験や障害を持った方も交えた実態調査を実施し、日比谷公園の現状や特性を整理した。また、平成 29 年 5 月の東京都公園審議会答申「都立公園の多面的な活用の推進方策について」が示す、①公園の緑とオープンスペースの重要な機能の確保・向上、②公園の個性・特性を発揮、③まちのなかの心地よい場の創出、④官民の連携・協働という多面的活用の方向性を参考にした。

日比谷公園グランドデザインでは、これらの検討を踏まえ、日比谷公園開園 130 周年を迎える 2033 年までの長期的な視点に立って日比谷公園の将来像を提言する。

４　日比谷公園グランドデザインの５つの提言

今回、本検討委員会では日比谷公園の将来像を、以下に示す５つの提言としてまとめた。

Ⅰ 誰もが迎え入れられ、心地よく過ごせる上質な公園

Ⅱ まちと連携し、相乗的に新たな魅力を生み出す公園

Ⅲ 歴史的、文化的価値を顕在化させた特別な公園

Ⅳ 緑とオープンスペースのネットワーク形成の核となる公園

Ⅴ 多様な主体と連携し、利用者の視点で運営する公園

第１章　日比谷園の歴史と特性

１　日比谷公園の歴史

（１）日比谷公園の成り立ちと施設の変遷

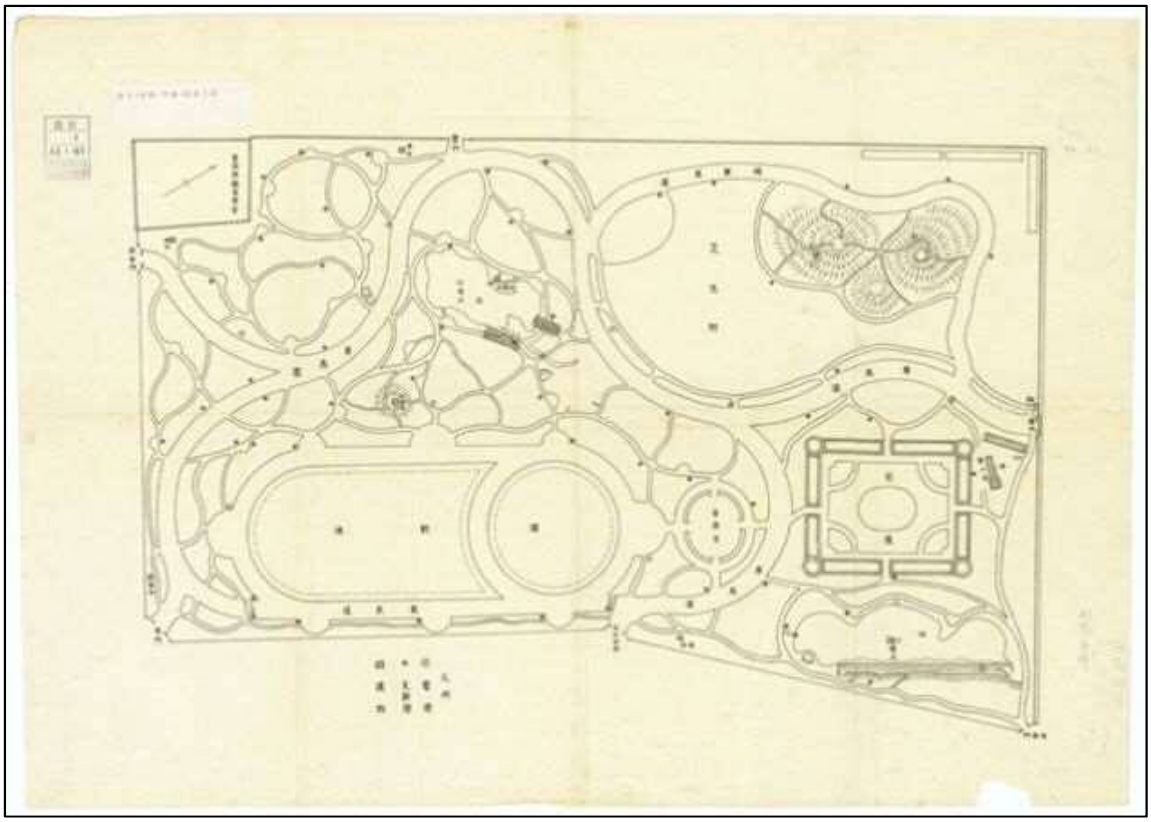
明治 20 年代から 40 年代は、新たな都市問題に対して公園の役割が認識された年代である。都市における工場の増加、労働人口の集中、交通運輸の整備、生産性の向上による住民福祉の充実等々の要因を踏まえ、公園の近代化が都市自体の課題ともされていた。

このように、都市空間における環境装置として公園の必要性に対する認識が高まる明治中期において、その先駆けとして実現した公園が日比谷公園である。

公園の設計は、ドイツの公園を範としている部分に、在来の日本庭園の手法も加えられ総合的近代公園の様式がとられている。わが国初の大規模な洋風公園であり、開園以来 115 年が経過し、震災や戦災、戦後の成長期と大きな節目を経て現在に至っているが、現在もその設計思想が園路の線形や地割に残され、その地割の中での改変が行われてきた。

明治 22 年(1889)	市区改正設計に日比谷公園が位置づけられる 第一日比谷公園(54,464 坪)
明治 36 年(1903)	開園(6/1)　→初めての**「洋花」** 300 坪の児童遊園設置 民間の洋風喫茶店等を公園施設として設置を許可 →初めての**「洋食」**
明治 38 年(1905)	音楽堂(現小音楽堂)落成　→初めての**「洋楽」** 日比谷焼打事件
明治 41 年(1908)	東京市立日比谷図書館開館
明治 42 年(1909)	伊藤博文公爵国葬会場となる　→国家広場的空間
明治 43 年(1910)	日比谷公園事務所完成(ドイツ･バンガロー風)
大正 11 年(1922)	大隈重信侯爵国葬会場となる　→国家広場的空間 専任児童指導員を初めて配置　→児童教育の先駆け
大正 12 年(1923)	本格的な野外音楽堂(現大音楽堂)落成 →政治集会や歴史的な野外コンサート等 関東大震災により 5 万人が公園に避難、運動場部分に 100 棟の仮設住宅設置　→震災への対応
昭和 4 年(1929)	日比谷公会堂落成　→政治集会や歴史的なコンサート等
昭和 35 年(1960)	地下駐車場整備により運動場が沈床芝生広場と大噴水に改変

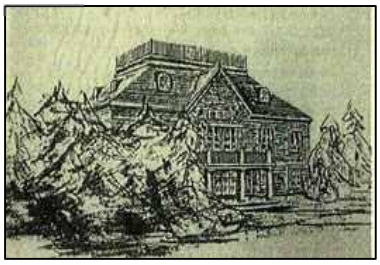
◇開園時の図面　明治 36 年（1903）



◇洋花

第一花壇（明治期）

◇洋食



松本楼のスケッチ（明治期）

◇洋楽

初代音楽堂の絵葉書(年代不明)

（２）日比谷公園の位置付け

名　称：東京市区改正設計第一　日比谷公園（明治 22 年 5 月 20 日）

東京都市計画公園第 1 号中央公園　（当初　昭和 32 年 12 月 21 日）

（最終　昭和 39 年 12 月 16 日）

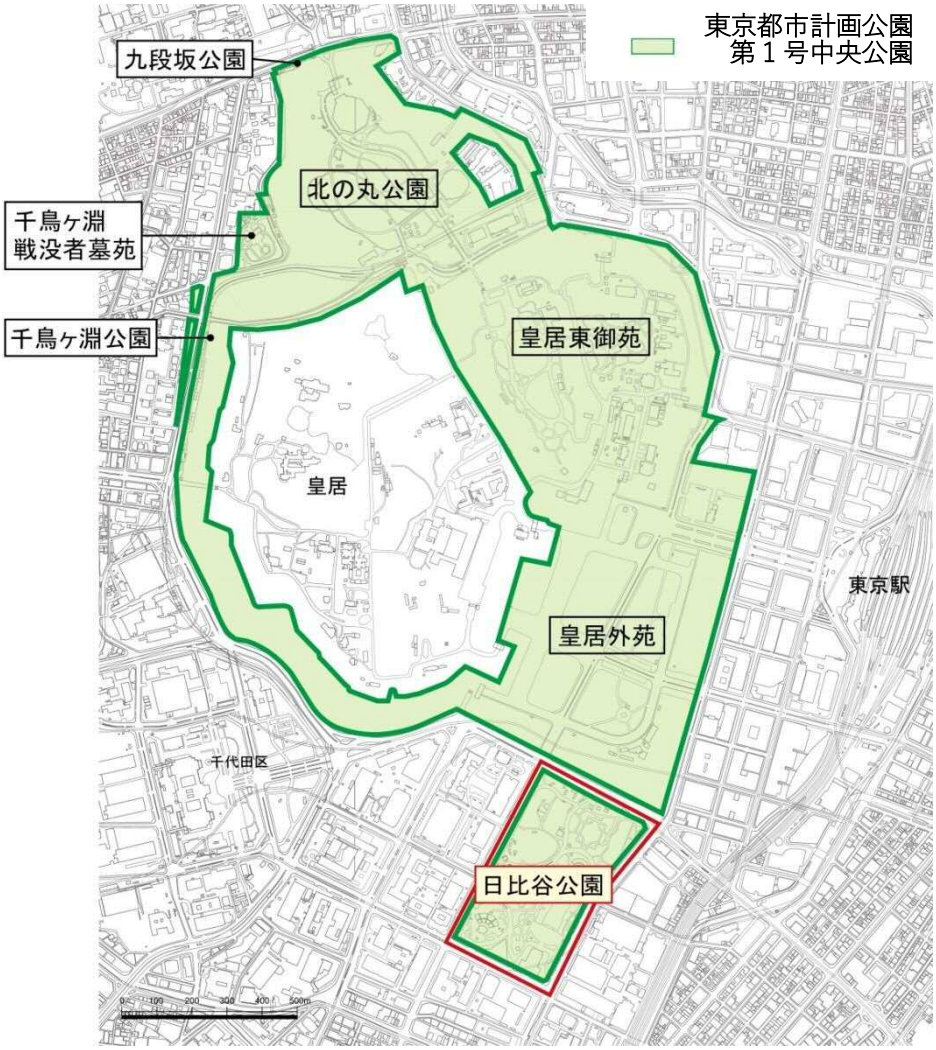
位　置：千代田区三番町、北の丸公園、皇居外苑、日比谷公園、九段南二丁目、一番町及び麹町一丁目各地内

規　模：155.92ha

詳　細（規模/開園日/管理者）

日比谷公園（16.16ha/明治 36 年/都）
千鳥ヶ淵公園（1.58ha/大正 8 年/千代田区）
皇居外苑（96.50ha/昭和 24 年/環境省）
千鳥ヶ淵戦没者墓苑（1.61ha/昭和 35 年/環境省）
九段坂公園（0.15ha/昭和 40 年/千代田区）
皇居東御苑（20.74ha/昭和 43 年/宮内庁）
北の丸公園（19.33ha/昭和 44 年/環境省）

（参考)東京都建設局　公園調書(平成 30 年 4 月 1 日現在)



2　日比谷公園の特性

（1） 利用特性

ア　静けさと賑わいが共存する利用空間

・平日はビジネス街の緑のオアシスとして多くの人が休息や散策等に利用しているが、子供の利用は少なく、障害者等の利用も限られている。

◇参考：平日お昼休みの風景

・図書館や大音楽堂（野外音楽堂）等の施設利用者や周辺に隣接している商業、文化、交流施設からの立ち寄りや通過利用が多い。

・イベントによる園地の占用が年間 200 日以上あり、大半は大噴水周辺のエリア（大噴水・小音楽堂・第二花壇）で行われる大規模なイベントとなっている。

◇参考：イベント時の賑わい

・公会堂は、これまで世界の著名な演奏家や交響楽団による演奏会や芸能発表会など文化発信拠点として大きな役割を果たすとともに、言論や教育分野の集会や行事も数多く行われてきた。

・大音楽堂（野外音楽堂）は長い歴史を通じて現在では伝説となっている様々なコンサートや時代を映す鏡となった様々な集会の舞台となった場所で、利用応募倍率は極めて高い。小音楽堂は、一般市民が初めて西洋音楽に触れた場所でわが国最初の公園の野外音楽堂である。

【主な課題】

・樹木が鬱蒼（うっそう）として暗く、植栽が単調である。

・開園当初から民間による飲食施設を導入する等、先導的なスタイルを確立してきたが、施設によっては園地との一体感に乏しく公園の魅力を損ねる箇所も見られる。

・テニスコートの利用率は高いが、周辺施設との調和に欠ける。

・JR や地下鉄等の駅も近く利便性が高い立地条件にあるが、広幅員道路や、地下道からの階段等のバリアが存在する等、まちと公園のアクセシビリティが良くない。

・公共地下駐車場があるが地上へのアクセスは階段で、公園との一体利用が無い。

・車椅子体験等の実態調査において段差が散見される等、全ての利用者に優しいバリアフリーの施設となっていない。

・日比谷公会堂は老朽化等の改善や機能向上の計画検討のため使用を停止している。

・大音楽堂（野外音楽堂）は、周辺施設に対する音の影響に配慮するため利用日や時間を制限している。

・様々なイベント等が行われているが、必ずしも公園の魅力を活かした活用等ができていない。

（２）歴史的・文化的特性

江戸時代の遺構を取り込み、明治 36 年(1903)開園時の設計思想を継承して現在に至っており、歴史的・文化的資源を数多く有する歴史を記憶する公園である。

ア　歴史を感じる施設

・日比谷見附跡の石垣や､江戸城の遺構を活用した心字池のほか、日比谷門等６箇所の門柱は枡形石垣の巨石を用いて造られる等、江戸からの歴史を伝えている。

・小音楽堂は設計当初から計画され、形を変えつつも同じ場所で機能を継承している

・日比谷公会堂は市政会館と一体となったゴシック様式の建造物で東京都選定歴史的建造物、旧日比谷公園事務所はドイツ・バンガロー風建築物の東京都指定有形文化財に指定されており、洋風公園の象徴的建物である。

・アーク灯や馬の水飲み等は近代の都市整備を象徴する施設として公園のためにデザインされたものと考えられている。

・これまで「３つの洋」に代表されるような新たな文化を発信する機能を担い、多くの来園者を引き付けてきた公園である

◇門柱（日比谷門）

◇馬の水飲み

◇雲形池と鶴の噴水

イ　ランドスケープを象徴する空間

・我が国初の洋風公園で、S 字型の大園路による４つの地割で特色のある空間が構成されており、時代や社会的な要請に対応して施設が拡充されてきた。

・日比谷見附跡と心字池は和風、第一花壇は洋風、雲形池は和洋折衷の設（しつら）えで、公園を象徴するランドスケープである。

・小音楽堂から大噴水、第二花壇、日比谷公会堂を結ぶ空間は、日比谷公園最大のオープンスペースである。そのヴィスタラインを中心とするシンメトリーな空間は美しさと安定感があり、公園を象徴するランドスケープである。

◇日比谷公会堂から小音楽堂へのヴィスタ

【主な課題】

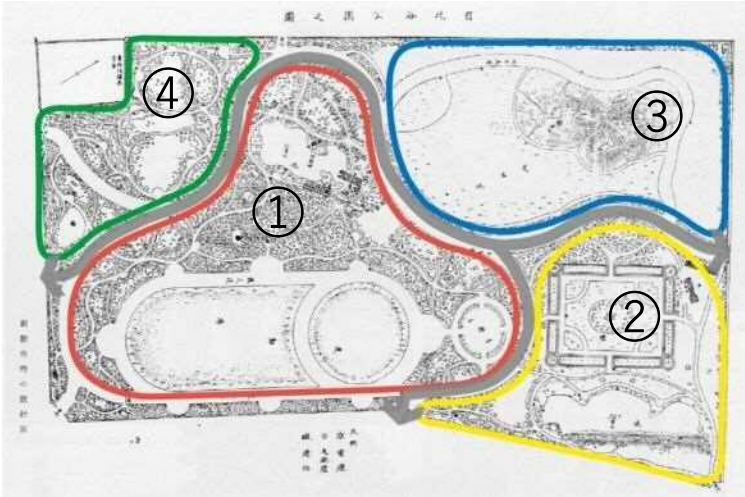
・歴史的、文化的に重要な施設やランドスケープ等、公園の有する価値に対する共通認識が管理者も含めて必ずしも形成されていない。

・これからの時代を牽引するような、新たな魅力に欠ける。

・歴史的、文化的に重要な施設が老朽化し、その価値に配慮した保全や更新が図られていない。

・公園利用者に歴史的、文化的価値を十分に伝えることができていない。

◇開園当時



施設の改変は、主に大規模建築物の設置に伴うもの

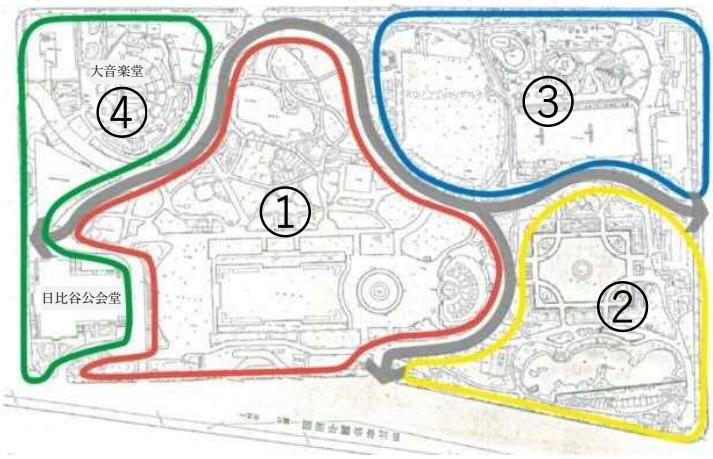
・ゾーン④(ドイツ風樹林地)への大音楽堂の設置

・日比谷公会堂の設置と園路の線形の改変

・ゾーン①では都市計画地下駐車場の設置に伴い運動場が沈床芝生地となり大噴水が設置

・ゾーン③(三笠山・草地等)では、時代に応じて健康運動施設が拡充される等の改変が生じた

◇現　在



（３）立地特性

ア　緑と水が集積する日本の顔

・日比谷公園から皇居につながる緑と水の空間は、世界の都市と比較しても誇るべき緑地空間であり、良好な都市環境を創出する都心の緑と水の核となっている。

・日比谷公園から皇居周辺の緑と水の空間は、日本の四季折々の自然の美しさを代表する景観を形成している。

・江戸城跡である皇居周辺にはこれまで継承してきた自然が残されており、日比谷公園が開園以来育んできた緑と水の空間と一体となって生き物のネットワークが形成されている。

■東京都の保護上重要な希少生物種の一例

◇カワセミ（日比谷公園）

◇キケマン（日比谷公園）

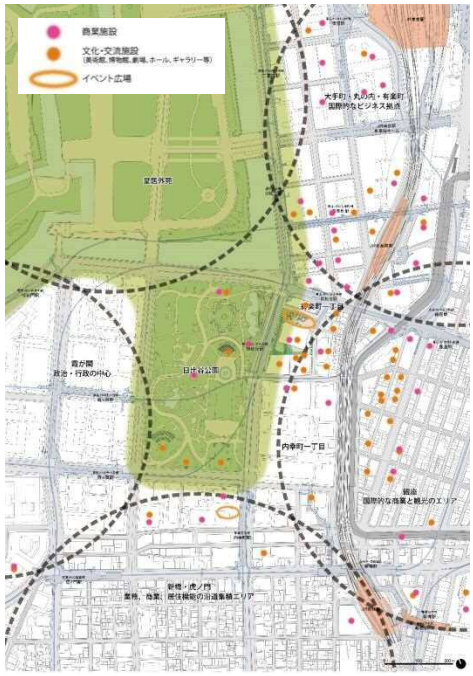
イ　文化・交流・迎賓機能が集積するまち

・明治時代から帝国ホテルや鹿鳴館等が建設され、劇場やホール等の国際的な交流施設や娯楽施設が集積している。近代の歴史的建造物も多く、現在も保全、活用されている。

・日比谷公園周辺は、北側に皇居、国際的なビジネス拠点である大手町・丸の内・有楽町、東側は日本を代表する商業地である銀座、南側はビジネスの集積拠点である新橋・虎ノ門、そして西側は霞が関の官庁街となっており、これら性格の異なるまちの中心となっている。

・近年、公園周辺では都市の再編が活発化し、文化・交流、迎賓等の機能が拡充される動向にあり、国内外より多様な人々が訪れている。

・地域の価値を高めるエリアマネジメント活動が進められ、まちの活性化が進んでいる。



◇日比谷公園を取り囲む性格の異なるまち

【主な課題】

・日比谷公園と隣接する皇居外苑等との回遊性を高めるような、整備や誘導が出来ていない。

・皇居を中心として緑が連担することによってエコロジカルなネットワークが形成されているが、緑のネットワークをまちに拡げていく連携が必ずしも十分でない。

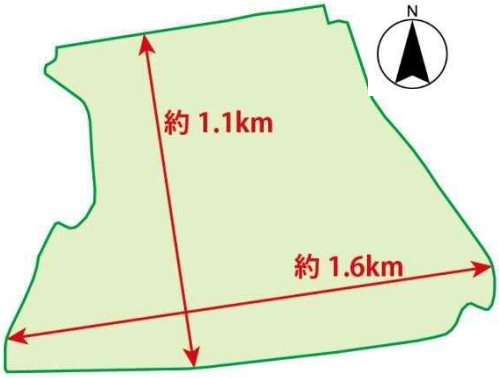
・東京都心の緑の核となる皇居周辺エリアは、都市計画上一つの公園として計画されているが、性格の異なる園地をそれぞれの者が管理しており、互いに魅力を高めあうような取組が不十分である。

・周辺の施設を訪れる多様な来訪者等に対し、都心の緑豊かな公園ならではの魅力を発信できていない。

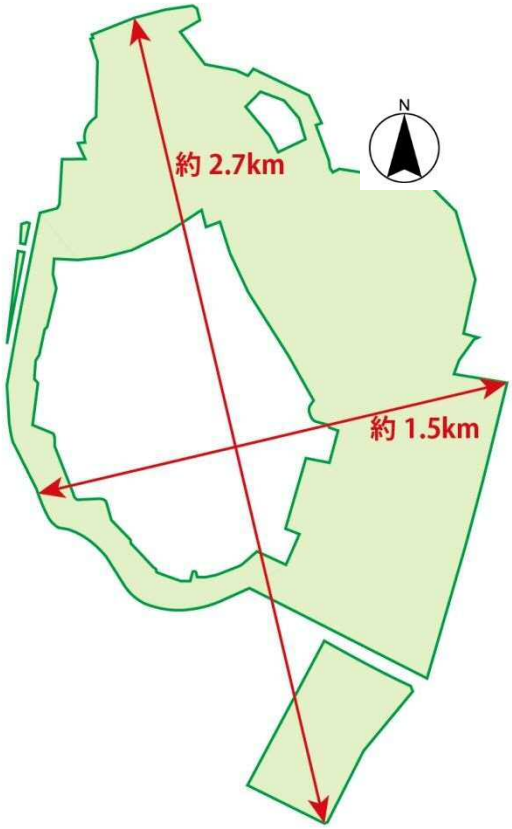
・周辺地域の施設やまちづくり団体によるエリアマネジメント活動と公園との連携が図られていない。

■世界の大規模公園と東京都市計画公園第 1 号中央公園の比較

◇参考：セントラルパーク/ニューヨーク_約 341ha



◇参考：ハイドパーク/ロンドン_約 142ha



◇日比谷公園を含む第 1 号中央公園_約 156ha

第２章　日比谷公園の将来像

１　検討の方向性

第１章では都民や利用者の視点から、日比谷公園の利用特性、歴史的・文化的特性、立地特性を整理し課題を抽出した。

日比谷公園は、高度な都市機能が集積し多様な人々が活動する日本と東京の活力を牽引する都心に立地し、公園の周辺では民間のまちづくりの動きも活発になっている。

また、皇居や皇居外苑等と共に東京都市計画公園第１号中央公園に位置付けられ、都心の緑の核として世界に誇るべき空間を形成している。

加えて、開園当初の設計思想を継承しながら、江戸から明治、大正を経て現在に至る東京の歴史が刻み込まれた公園である。そして、「３つの洋」など公園が発信した文化や、公園が舞台となった数々の出来事や体験と共に人々の記憶に留められている公園である。

今後東京の魅力をさらに向上させていく上で日比谷公園の役割は非常に大きく、そのポテンシャルを最大限に活かし、まちと連携しながら東京の魅力と活力を創出する、世界に誇れる中央公園を目指すことが重要である。

そのためには、日比谷公園が 110 余年にわたって紡いできた歴史的、文化的価値や、皇居に連担する緑の空間を更に磨き上げ、誰もが気軽に訪れ心地よく過ごせる、上質な空間を提供していかなければならない。

また、公園が周囲のまちに溶けこみ、まちと共に新たな魅力や賑わいを創出するとともに、公園が核となり、まちに緑が拡がり、緑のネットワークの形成を促進していくべきである。

そこで、本検討委員会では、日比谷公園の将来像について、５つの提言として以下に示す。

２　日比谷公園の将来像

Ⅰ　誰もが迎え入れられ、心地よく過ごせる上質な公園

ⅰ　緑に包まれた潤いある心地良い空間を創出し、新たなライフスタイルを提案する。

【主な取組】

・広々とした芝生の広場やラウンジのような場所など多様な来園者が思い思いに心地良く過ごせるサード・プレイスとなる空間を創出する。

・誰もが安心、安全に利用できるよう、見通しが良く死角の無い明るく快適な都心の森をつくっていく。

・質の高いサービスの充実や施設の整備、改修等により、来園者の様々なニーズに対応する。

・人と人、人と地域とのつながりや、多様な主体による公園の魅力づくりへの参画を促進する。

■心地よく過ごせるサードプレイスのイメージ

◇日比谷公園__日比谷見附跡

◇ニューヨーク_ワシントンスクエアパーク

■人と人、地域との繋がりを生み出す公園のイメージ

◇ニューヨーク_ブライアントパーク

◇上野恩賜公園__竹の台広場

ii　バリアを無くし、誰もが利用しやすいインクルーシブな空間を創出する。

【主な取組】

・段差等のバリアを解消するとともに、施設整備に当たってはユニバーサルデザインに配慮する。

・利用者同士が気遣い、助け合う公園であることをうたう公園憲章を定める等、公園のあり方を先導的に発信する。

・誰もが簡単に必要な情報を入手できるよう、パンフレット、Web 等多様なツールを活用し、多言語で情報を発信するとともに Wi-Fi 環境を充実させる。

iii　安全、快適かつ自由に多様な人々が訪れることができるよう、公園と周辺のまちとのアクセシビリティを向上し、回遊性を確保する。

【主な取組】

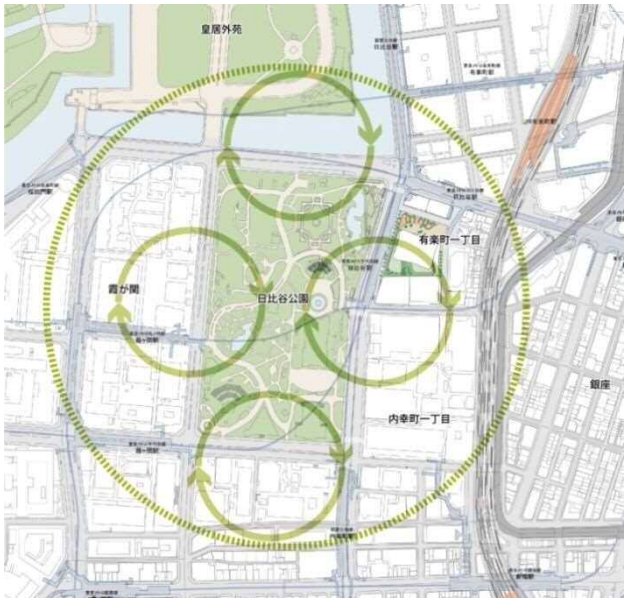
・地下やデッキ等、憩い、集える空間を周辺のまちづくりにあわせて創出し、まちと公園を重層的につなぐ。

・日比谷公園に近接する駅等の公共交通機関から公園までのバリアフリールートを拡充する。

・主要なターミナル等で日比谷公園へのアクセス情報の発信を検討する。

・障害を持つ利用者等が来園した場合の駐車スペースの確保など誰もが利用しやすい環境整備を検討する。

■公園とまちとの回遊性強化イメージ



◇シカゴ_ミレニアムパーク

Ⅱ　まちと連携し、相乗的に新たな魅力を生み出す公園

ⅰ　公園とまちが相互に連携、連動し、芸術やエンターテインメントの多彩な魅力を先導的に打ち出す。

【主な取組】

・年間を通じて多様な利用に供し、魅力を発信する施設として、日比谷公会堂や大音楽堂などを改修する。

・公園と周辺地域が連携、連動して相互の特性を活かしながらイベント等を実施する。

・周辺に立地するホールや劇場、映画館等と連携し、地域の文化教育並びに交流環境を充実させる。

■周辺地域と連携したイベントイメージ

ⅱ　公園とまちを回遊しながら一体的に利用できるよう誘導する。

【主な取組】

・シェアサイクルポートの設置や、観光バスやツアー等のルートへの位置づけ等により、地域を回遊できる手段を多様化する。

・周辺のまちと連携し、日比谷公園と地域の歴史的、文化的資源やイベント等の情報を一元的に発信して地域全体の魅力を向上させる。

■参考　公園及び周辺の歴史的・文化的資源の一例

◇歴史的建造物に指定されている日比谷公会堂

◇日比谷公園に隣接する皇居外苑の桔梗門

ⅲ　周辺のまちを背景として、歴史を積み重ねた公園ならではの魅力的な景観を見せる。

【主な取組】

・公園が育んできた緑と水の空間と周辺の建築物との対比など魅力的な景観を楽しめるビューポイントを創出する。

・景観のポイントとなる施設をライトアップ等によって際立たせ、公園の魅力を向上させる。

・周辺のまちづくりに当たって、公園からの見え方を考慮した建築物の配置やデザイン等との調整を図り、公園の魅力的な景観を保全、創出する。

・周辺のまちを視点場として公園を俯瞰（ふかん）した際の景観に配慮した施設整備や植栽等の管理を実施する。

■参考　日比谷公園とまちとの対比の例示

◇まちを背景とした心字池

■参考　ライトアップにより
施設の魅力を向上させる例示

◇東京駅のライトアップ

Ⅲ　歴史的、文化的価値を顕在化させた特別な公園

ⅰ　開園当時の設計思想を継承し、特色のある園地やシークエンス(※4)を活かす。

【主な取組】

・歴史的、文化的価値を明らかにし、将来に継承する保存と管理の計画を策定する。

・園路からのシークエンスやビューポイントからの景観を考慮した空間を創出する。

・イベント等においてもヴィスタ景観を活かす等、日比谷公園ならではの空間利用を誘導する。

ⅱ　歴史的、文化的価値のある公園施設を保全、修復し、活用するとともに、歴史を感じさせる緑を活かし、風格のある地域景観を形成する。

【主な取組】

・第一花壇、心字池と石垣、雲形池と周辺の樹林地など歴史的価値のある空間や施設を修復し、公園の顔として活用する。

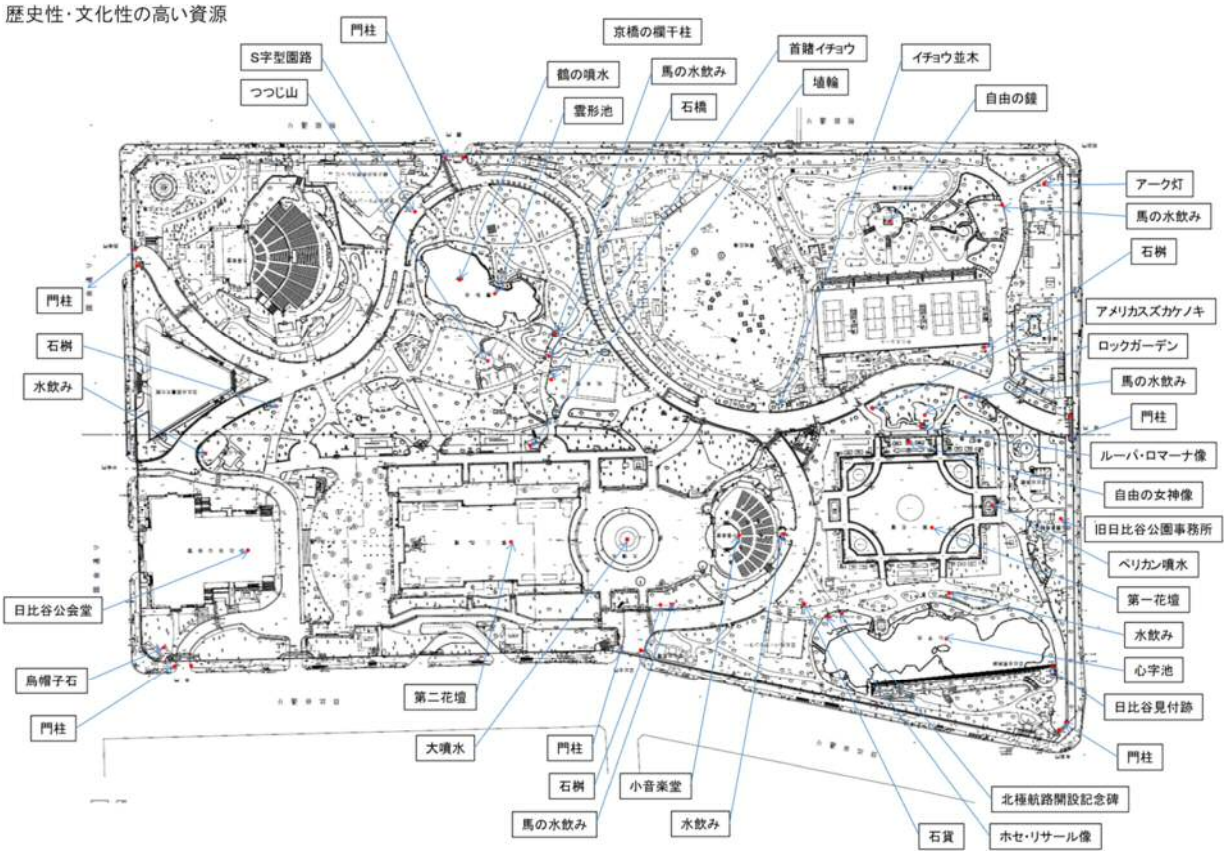
・園内の石組みや石垣、門柱等、江戸城や大名屋敷の石材を活用した施設を貴重な歴史的資源として活用する。

※4　園路を歩きながらなど視点の移動に伴って継時的に変化する景観を体験するもの
（景観形成ガイドライン「都市整備に関する事業」H23.6 国土交通省都市・地域整備局）

・都指定有形文化財の旧日比谷公園事務所や都選定歴史的建造物の日比谷公会堂等の歴史的価値を保全しつつ、多様な目的に活用する。
・公園や施設の歴史的、文化的価値を明らかにし、多様なツールで広く発信する。
・日比谷公会堂や日比谷見附跡等、景観上重要な施設や公園の歴史を象徴する樹木等を保全するとともに、それらの視認性が高まるよう植栽の管理等を実施する。

■参考　景観上重要な施設の一例

◇江戸城の遺構である日比谷見附跡



Ⅳ　緑とオープンスペースのネットワーク形成の核となる公園

ⅰ　日比谷公園と皇居周辺の緑が核となって、緑の回廊を形成する。

【主な取組】

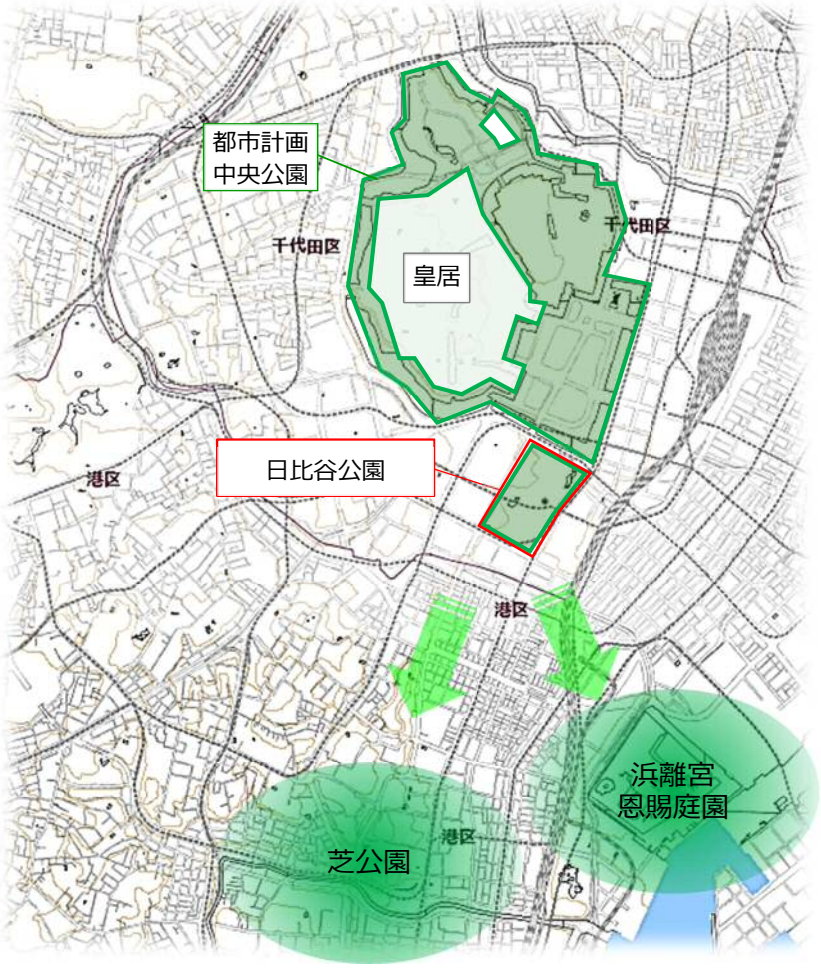
・まちづくりにあわせて、公園に連続した一体的な緑やオープンスペースの創出を誘導し、緑のネットワーク形成や回遊性、地域の防災性の向上等を図る。

・日比谷公園周辺の緑のネットワークを核に、まちづくりに伴い創出される緑やオープンスペースを連続させ、都立公園等の緑の拠点とつなぐ都市の緑の骨格を形成していく。

・日比谷公園を結節点として、皇居に生息する多様な生き物の生息域を周辺に創出された緑へと拡げ、エコロジカルネットワークを形成する。

・皇居の生態系とのネットワークに配慮した取組を実践し、その成果を発信する。

■緑のネットワーク形成のイメージ



ii　皇居外苑等との一体感の創出や一元的な情報発信により、中央公園（セントラルパーク）として一体的な利活用を促進する。

【主な取組】

・日比谷見附跡や祝田門付近等で、皇居へのつながりを感じられるビューポイント等を創出する。

・中央公園（セントラルパーク）として統一サインを設置するとともに、公園施設のデザインや色を統一する等により一体感を演出する。

・日比谷公園が皇居外苑等の一元的な情報を発信する等、中央公園（セントラルパーク）のビジターセンター機能を担う。

■参考　一元的な利用の情報発信の例示

◇「緑の散歩道」パンフレット

V　多様な主体と連携し、利用者の視点で運営する公園

i　都民、NPO、企業や周辺のまちと連携しながら、公園全体を維持、運営し公園の魅力向上を図る。

【主な取組】

・公園の事業に係る協議会（コミッティ）等を設置し、公園を整備、維持、運営する。

・公園施設のあり方を協議し、整備や維持、運営に関する公園独自のルールづくりを進め、効果的に運用する。

ii　周辺のまちづくりを担うエリアマネジメント団体等との連携を進め、公園とまちとの一体的な運営を図り地域の魅力の向上を図る。

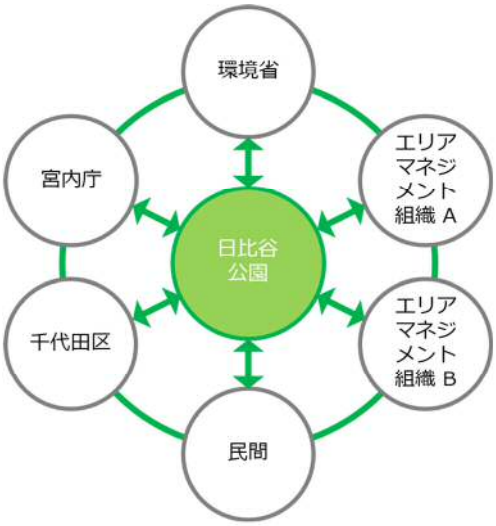
【主な取組】

・イベント等の企画、運営や共通施設利用券の発行、散策ルートの設定等公園とまちが連携し賑わいを創出する。

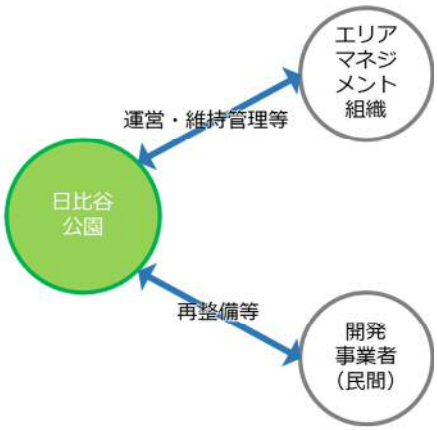
・共通パンフレットや共通 Web サイトの運営、SNS の活用等により、公園と地域が一体となって情報を発信する。

・公園がまちづくりの計画段階から参加することで、開発に際してオープンスペースネットワークやエコロジカルネットワークの形成を実現する。

・公園とまちの一体的な運営を担う組織づくりを進める。



◇連携イメージ



◇運営・維持管理、再整備体制のイメージ

3　ゾーン別の将来像

前項で提示した５つの提言を S 字型園路で分割される４つのゾーンに反映させた将来像を参考として以下に示す。

【ゾーン①】

○ 周辺のまちと連携し、賑わいの拠点として首都東京の文化を発信するゾーン

○ 日比谷公会堂を中心としたヴィスタが美しく映える開放的な広場

○ アクセスしやすく、障害を持つ利用者と共に同じ目線で楽しみ、憩うことができる開放的な広場がある空間

【ゾーン②】

○ 皇居との緑の一体感を演出し、江戸・東京の歴史を体感するゾーン

○ 大手町・丸ノ内・有楽町エリアへの 玄関口

○ 近代日本最初の洋風公園としての風格ある景観で､園内へと花で誘う空間

【ゾーン③】

○ 子育て世代を含む全ての世代が憩い、佇(たたず)むことができるゾーン

○ 皇居と一体となった緑と景観を楽しむことができる空間

○ 誰もが楽しみ、活き活きと活動できる空間

【ゾーン④】

○ 日本最初の近代公園として洋楽文化を世界に向けて発信するゾーン

○ 豊かな緑の中に歴史的建造物がもつ風格と現代建築の魅力が融合する

○ 官民連携で、まちに開かれた賑わい空間を創出

○ 東京の歴史をより深く知り、学ぶ空間

第３章　将来像の実現に向けて

１　事業実施のイメージ

（１）2020 年に向けた取組

2020 年には、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、日比谷公園は東京 2020 大会の気運醸成としての活用が予定されている。国内外から多様な人々が訪れる本大会は、提言した日比谷公園の将来像とその価値を都民、利用者が共有できる好機である。

このため、まず、段差等のバリアの解消やユニバーサルデザインに配慮した施設整備を行い誰もが利用しやすい空間を創出するとともに、安心、安全に利用できるよう明るく快適な森づくり等を速やかに実施すべきである。

更に、都民、利用者との合意形成が必要な取組は、2020 大会期間を社会実験の期間と見なして実施することも考えられる。

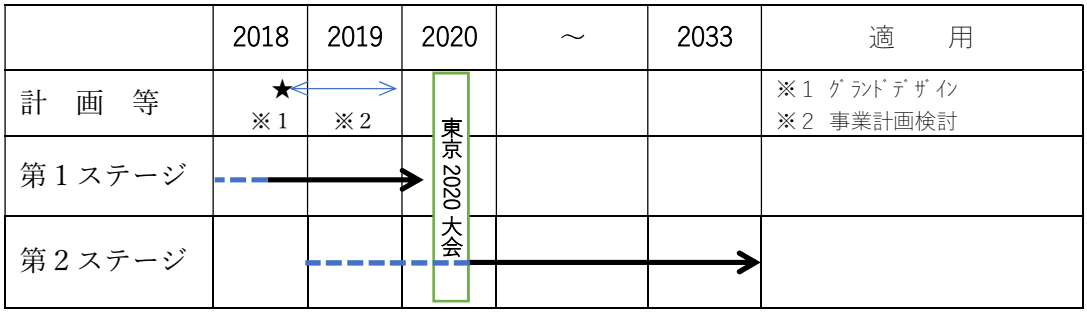
（２）事業の進め方

将来像の実現に向けては、提言に基づき具体的な整備計画を策定する等により、計画的に事業を進めていくことが望ましい。しかし、円滑に事業を進めるためには、都民や利用者はもちろん、関係する事業者等に十分な説明を行い、整備計画に対する合意形成を丁寧に進めていくことが不可欠である。このため、公園の運営等に関わる関係者が参加する協議会を早期に設置すべきである。

一方、公会堂の耐震化など速やかに実施すべき事業があるほか、周辺のまちづくりの進捗にあわせて検討し進めることが適当な取組もある。そこで、整備計画に先行して様々な取組を進めるに当たっては、利用者の声に耳を傾けそのニーズを的確に把握し、関係者間での情報共有や相互連携を重ねることを通じて、将来像に対する共通認識を深めた上で、実施を検討していくことが重要である。

２　段階的な取組

将来像の実現に向けての事業実施は、東京 2020 大会までを第１ステージ、2033 年までを第２ステージとして、継続して取り組んでいく。



添付資料１　　日比谷公園グランドデザイン検討委員会名簿（平成 30 年 10 月時点）

	氏　　名	役　　職	専　門
委員長	進士　五十八	福井県立大学学長 東京農業大学名誉教授	造園
副委員長	岸井　隆幸	日本大学理工学部特任教授	都市計画
	アレックス・ カー	東洋文化研究者	東洋文化
	宇田　左近	ビジネス・ブレークスルー 大学副学長	経営
	亀山　章	東京農工大学名誉教授	文化財・ 自然生態系
	白洲　信哉	文筆家、プロデューサー	日本文化
	保井　美樹	法政大学現代福祉学部 人間社会研究科教授	エリア マネジメント
	久保田　浩二	東京都都市整備局 都市づくり政策部長	
	花井　徹夫	東京都建設局 総務部企画担当部長	
	日浦　憲造	東京都建設局 公園緑地部長	
	細川　卓巳	東京都建設局 公園計画担当部長	

添付資料２　　検討会開催の経緯

第 1 回検討会（平成 29 年 10 月 16 日）
第 2 回検討会（平成 30 年 1 月 29 日）
第 3 回検討会（平成 30 年 3 月 9 日）